高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2012 ユースリーグ栃木　2 部・3 部・昇格トーナメント総括

2 種リーグ担当　　栃木県立今市高等学校　　梁島　将光

ユースリーグ栃木は今年度で 8 年目を迎え、毎年改善を加え、じょじょにではあるがリーグ戦の形ができつつある。このリーグ戦の大きな目的は、リーグ戦を通して栃木県ユース年代トップレベルの選手育成・強化を図ることである。4～11 月まで継続的にリーグ戦を実施し、12 月には 1・2 部昇格トーナメントを実施した。昨年度からの大きな変更点としては、グループごとのチーム数を 8 チームから 10 チームに増やし、より多くのチームが参加するようになった点である。グループごとのチーム数の部分を含めて、基本的には日本サッカー協会のプレミアリーグやプリンスリーグの実施状況にならっている。1 部同様に 2 部・3 部も 4 月に開始し、10 チームの総当たりで 2 試合ずつ、1 チームあたり 18 試合を実施した。半期のみ参加の 4 チームを含め、1～3 部まで合計 70 チームがリーグ戦に参加している。

2 部リーグは A,B の 2 グループ編成で、10 チームずつの合計 20 チームが参加した。1 部と同様に参加校は全県に渡り、実施場所も各校の校庭や公共施設を利用した。18 節実施し、最終順位でグループごとに上位の 1,2 位チーム合計 4 チームが昇格トーナメントに進出し､下位の 9,10 位チーム合計 4 チームが 3 部へ降格となった。2 部リーグのうち複数チーム(B チーム)の参加は 3 チームで、矢板中央 B、宇都宮白楊 B、真岡 B が参加した。どのチームも A チームは 1 部リーグに参加しており、B チームは過去に 3 部から 2 部に昇格して、他の A チームの学校と遜色ない試合を継続した。両グループとも、勝ち点 30 以上の上位 4 チームが熾烈な昇格争いを繰り広げ、勝ち点 20 未満の下位 3 チームが残留争いを展開する、最終節まで目が離せない拮抗した戦いが続いた。グループ A からは 1 位の宇都宮工業と 2 位の益子芳星、グループ B からは 1 位の小山南と 2 位の白鴎足利が 1 部昇格トーナメントへの進出を決めた。

3 部リーグは a,b,c,d の 4 グループ編成で、半期のみの参加チームを加えて 10 チームずつの合計 40 チームが参加した。参加校については地域ごとに区切り、a は北部、b と c は中部、d は南部のチームでグループを編成している。ただし、複数チームについてはグループの編成上、南部のチームは中部のグループに参入している。2 部と同様に 18 節実施し、最終順位でグループごとに上位の 1,2 位チーム合計 8 チームが昇格トーナメントに進出した。3 部リーグのうち複数チーム(B,C チーム)は 12 チームで、矢板中央 C、さくら清修 B、小山南 B、栃木 B、宇都宮 B、栃木工業 B、青藍泰斗 B、佐野日大 C、白鴎足利 B、益子芳星 B、宇都宮工業 B、宇都宮白楊 C が参加した。2 部同様に全てのグループとも、勝ち点 30 以上の上位 3～4 チームが昇格をめぐり最終節までしのぎを削った。グループ a からは 1 位のさくら清修 B と 3 位の矢板東、グループ b からは 1 位の鹿沼東と 2 位の佐野日大 C、グループ c からは 1 位の作新学院と 2 位の宇都宮清陵、グループ d からは 1 位の足利と 2 位の足工大附が 2 部昇格トーナメントへの進出を決めた。なお、グループ a2 位の矢板中央 C は、2 部リーグに矢板中央 B が参加しているため昇格トーナメントへの参加はできず、3 位の矢板東が繰り上がった。

年度初めの 4 月に始まったリーグ戦は、7 月末で前期を終了し、夏休みを挟んで後期は延期分を含めて 11 月まで実施され、18 節すべての日程を終了した。12 月中旬にプリンスリーグ関東参入戦が実施され、栃木 SC ユースが埼玉県の武南高校に敗れ、栃木県からは佐野日大のみが来年度のプリンスリーグ関東に参加することが決定した。その後、12 月下旬にユースリーグ栃木 1・2 部昇格トーナメントが実施された。その結果、1 部昇格を決めたのは小山南と白鴎足利、2 部昇格を決めたのは鹿沼東、足利、足工大附、佐野日大 C であった。リーグ戦と昇格トーナメントの結果をふまえ、来年度のリーグ予定がこれから組まれることになる。

来年度のリーグ戦については、基本的には今年度の形を踏襲し、グループごとに 10 チームの編成になる。今年度と同様に 1 部 1 グループ、2 部 2 グループ、3 部 4 グループの合計 7 グループ 70 チームほどの参加を見込んでいる。さらに質の高いリーグ戦になっていくように、今年度の反省をいかしていきたい。